

## 家族造形法による空間的距離と 質問紙による心理的距離との関連について

The relationship between interpersonal spatial distances in the family sculpture and psychological distances among the family members measured with the questionnaire

興津真理子<sup>1</sup> 早樫一男<sup>1</sup>

Mariko OKITSU Kazuo HAYAKASHI

### 要 約

家族造形法は家族療法の一技法として開発されたものであり、これまで経験的には臨床的意義が認められてきているものの、体験的技法であるがゆえに、その特徴を伝えることが難しいという側面を持っている。そのため、とくにわが国においては家族造形法の利用はそれを知る一部の者に限られ、実証的研究もほとんど行われてこなかった。そこで、本研究はそうした家族造形法の基礎的研究として、造形に表現される空間的距離が、質問紙によって測定される心理的距離とどのような関係にあるのかを検討することを目的とした。女子大学生20名に自分の立ち位置から見て両親役の実験者を適切な距離に配置し、姿勢やポーズなども含めて制作する造形を行うよう求めた。その二者間の空間的距離と、三者で形成される面積とが質問紙による親子の心理的距離、両親間葛藤の認知、家族機能測定尺度による凝集性、適応性とどのように関連するのかを検討した。その結果、対母親、対父親の二者関係における造形による空間的距離と心理的距離との相関は、父親のみで有意であった。また、夫婦間の空間的距離が離れているほど、子どもである参加者が評定した両親間葛藤認知尺度の深刻さが低かった。これらの結果について造形における距離の特徴に関する議論がなされた。

キーワード：家族造形法、親子関係、心理的距離、空間的距離

### はじめに

#### 家族造形法とは

家族造形法 (Family Sculpture) は、1960年代後半、心理劇の背景を持つ David Kantor によって始められた家族療法の技法であり、Duhl, Papp, Satir などの体験学派の家族療法家によって広められてきた (Bischof &

Helmeke, 2005)。精神療法やカウンセリングは家族（関係）について、語り中心の手法であるが、家族造形法は家族メンバーを彫刻として配置することを通して、家族のパターンを見て、直接関与する手法とされている (鈴木・渋沢・桜井・鈴木・光元・斉藤・中村・生島, 1986)。

実際の相談場面においては、以下のように家族造形を進める。家族関係を彫刻家役（家族メンバーから選出）が家族のイメージや風景を造形することになる。具体的には、ファシリテーター（面接担当者）の進行に従い、家族を粘土

<sup>1</sup> 同志社大学心理学部 (Faculty of Psychology, Doshisha University)

のかたまりとみなし、一人ずつ配置し、姿勢、視線、表情などを作っていく。全員を配置後、一分程度静止し、感情や気持ちに集中する。そして、どのような感情が湧いてきたかなどをお互いにフィードバックする。

家族造形法は、診断的側面、治療的側面の両方を備えている。すなわち、家族内の相互作用の様相（親密さや距離感、権威、非言語的コミュニケーションのパターンなど）を可視的、感覚的、象徴的に理解するという家族アセスメントに用いることも可能であるし、家族内の関係を「いま、ここで」、視覚的・具体的に表出することによって、家族が相互の認知を深めたり、感情を分かち合うことを目的に、介入的に用いることも可能である。

### 家族造形法の展開

わが国で、家族造形法について書かれたものはいまだ少なく、代表的なものとしては Sherman & Fredman (1986) の翻訳である『家族療法技法ハンドブック』の中で「家族彫像化技法」、「家族振付け法」として事例と共に紹介されている。また、家族造形法の創始者の一人である体験派の家族療法セラピストである Bunny Duhl によるワークショップについての紹介と報告が家族療法研究に報告されている（鈴木, 1990 ; Duhl, 1990）。このワークショップは1988年8月に国立精神・神経センター、1989年には京都や福岡、1990年2月に国立精神・神経センター、1991年には北海道・東京などで開催された。Duhl (1983) によれば、家族造形法には「境界造形法」、「歴史造形法：出生よりある時期まで」など様々なバリエーションがあり、それぞれのワークショップではそれらが紹介された。

ワークショップに参加し、家族造形法を学んだ第二著者は、事例検討の方法として家族造形法を積極的に使っている（早樫, 2010, 2011a, 2011b 参照）。事例検討での利用の場合は、事例提出者や担当者が彫刻家になり、その場の参加者が家族役を引き受けることになる。

Figure 1 は家族造形法を用いて事例検討をしている研修会の様子である。

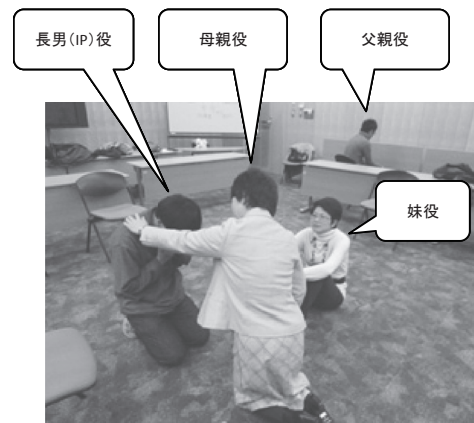


Figure 1 家族造形法による事例検討の様子

空間的距離から生まれる心理的距離や感情、姿勢から生まれる気持ちなど、家族造形完成後のフィードバックから事例提出者が発見するのは非常に多くある。また、セラピスト役の人物も配置することによって家族への援助を検討することも可能であるし（誰のそばにセラピストがいると家族は良い感じを持つのかなどの吟味が可能）、家族に将来的に起こりそうな変化を空間的に配置し、体験してみることも可能である。これはたとえば、子どもが成長によって巣立つことを、造形から子どもが「出ていく」ことにより表現し、その時の他の家族メンバーの体験を吟味するなどといったことである。また、家族役も自分の体験にはない家族への感情を体験したり、ある家族を外から見るのとは全く異なる感情を味わったりという新鮮な体験をする。

このように家族造形法では体験に基づく家族理解が可能なので、セラピストのトレーニングの一環として利用しているとの報告も少ないながら存在する (Costa, 1991 ; Marchetti-mercier & Cleaver, 2000)。

### 類似の呼称の手法との違い

「sculpture」、という名前がついているが、

Kvebaek Family Sculpture Technique (KFST) (Kvebeak, Cromwell & Fournier, 1980) などの異なるものがある。これは、家族に見立てたブロック人形をチェス盤のようなボードの上に配置するものである。類似した手法には、Family System Test (FAST) (Gehring, 1985), Doll Location Test (DLT) (八田, 1977) などがあり、こうした家族人形を配置する手法は、主として家族システムのアセスメントの目的で行われる。Berry, Hurley, & Worthington Jr (1990) によれば、KFST は家族造形法よりも数量化が容易であり、ゲーム感覚で取り組めるので、脅威を感じにくいといった利点があることが指摘されている。一方で、こうした手法は家族を外から見て制作するものであり、配置を体験するというよりは、配置から家族を理解するという性質が強い。したがって、人間を配置し、自分もその中の一員として視点をもち、主観的体験として家族を味わうという家族造形法とは性質を異にすると考えられる。

また、こうした変法によって、数量化が容易になったとされていることからわかるように、元来の家族造形法の数量化は困難であるとされてきた。しかし、家族造形法の有用性を共有し、特有の体験を記述していくためには、より数量化しやすい手法ではなく、家族造形法そのものを数量化することによる基礎的研究も必要であろうと考えられる。

### 本研究の目的

先述のように、家族造形法に関する基礎的研究はほとんど手つかずの領域である。これを容易にするものとして、KFST をはじめ、人形を配置する手法も開発されているが、家族造形法の主観的体験を記述し、それを心理学的に明らかにしていくには、家族造形法そのものの基礎的研究は欠かせないと考えられる。そこで、本研究では、その緒として家族造形法における親子あるいは夫婦の空間的距離と、質問紙により測定した心理的距離との関係を調べることを目的とした。大野木 (2009) では、質問紙によっ

て親子の心理的距離と、空間的距離を測定しその関連を見たところ、有意な正の相関が見いだされ、いずれの距離においても、対母親の方が対父親よりも有意に近かった。この空間的距離を家族造形法を使って調べた場合、質問紙による検討と同様の傾向が見いだされるのであろうか。造形での夫婦の空間的距離と、質問紙による夫婦葛藤との関連、造形の各空間的距離と、質問紙により測定された家族機能との関連も併せて検討する。

## 方 法

### 参加者

女子大学生20名 (平均年齢21.05歳) であった。第一著者のゼミの学生が依頼をし、承諾した者が実験に参加した。参加した学生には報酬として500円の図書券を渡した。

### 質問紙

**心理的距離尺度 (金子, 1991)** 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離を測定するために、信頼感や理解、心のつながりを測定する尺度であり、10項目からなる。対象との心理的距離が離れていることを示す。本調査では父子、母子の心理的距離を測定するのに用いた。「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

**両親間葛藤認知尺度 (川島・眞栄城・菅原・酒井・伊藤, 2008)** 青年期の子どもによる両親間葛藤の認知を測定する尺度であり、20項目からなる。「葛藤の深刻さ」、「葛藤への恐れ」、「葛藤による自己非難」の3つの下位尺度がある。「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」の5件法によって回答を求めた。

**家族機能測定尺度 (草田・岡堂, 1993)** この尺度はOlson, Porter, Lavee (1985) によるFamily Adaptability and Cohesion Evaluation Scale III (FACES III) の邦訳であり、家族メンバーが互いに持つ情緒的なつながりである凝集性と、家族に状況の危機や発達の

危機があった場合に、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力である適応性という2つの次元を測定する下位尺度を持つ20項目からなる質問紙である。それぞれ4つのサブタイプを仮定している。すなわち、得点が高い場合から順番に、家族凝集性については、「遊離」「分離」「結合」「膠着」であり、家族柔軟性については、「硬直」「構造化」「柔軟」「無秩序」である。本来はこの組み合わせによって、各家族を「バランス群」「中間群」「極端群」の3タイプに分類するが、本研究では、凝集性尺度得点と適応性尺度得点をそのまま用いた。合計得点が高いほど凝集性、適応性が高いことを示す。なお、質問への回答は「1. まったくない」から「5. いつもある」の5件法で求めた。

## 手続き

質問紙への回答を最初に求め、記入後に家族造形法による、自分と両親の配置を行った。

家族造形法については以下のように進めた。まず、参加者を床に印をつけた参加者の立ち位置に誘導した上で、以下のように説明および教示を行った。「これから、ご自分のイメージするご自分とお父さん、ご自分とお母さんとの関係を造形で表現して頂きます。」と伝え、父親役、母親役となる実験者を紹介した。そして、「手を引くなりしてもらっても構いませんので、彼らを人形と思ってご自分で動かして下さい。最初にお父さん、お母さんをイメージした距離感で彼らを配置してもらいます。彼らのポーズや向き、立っているか座っているかなども自由に指定して頂いて構いません。」と指示した。実験参加者自身もポーズなどは自由に造って構わないことを伝えた。配置が終了した後、各々のポーズや向き、立っているか座っているかなどの変更があるかを確認した。

造形が完成した後に、その状態を30秒間維持させ、30秒後に造形の立ち位置は維持したまま、そこでの居心地の良さや、誰に関心が向くかなど、いくつかの質問をした。その後各人物のつま先に印をつけ、その印の間の距離を空間

的距離として以下の4つの距離を測定した。対母親距離（作り手となった参加者と母親との距離）、対父親距離（参加者と父親との距離）、両親間距離（父親と母親の距離）、対両親距離（父親と母親の距離の midpoint と、参加者との距離）である。

## 結果

### 造形における距離

Figure 2 に対父親、対母親、父母間、対両親の距離を示した。

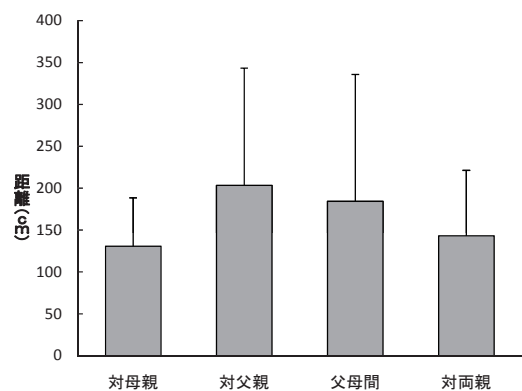


Figure 2 家族造形法による家族成員間距離の平均値（エラーバーは標準偏差を示す）

対母親、対父親の距離について、対応のある  $t$  検定を行ったところ、有意差が認められた ( $t(19) = 2.57, p < .05$ )。また、父・母・子の三者を結んでできる三角形の面積をヘロンの公式によって求めたが、この平均値は、 $10439\text{cm}^2$  ( $SD = 12035$ ) であった。

### 尺度得点の平均値

各尺度得点の平均値を Table 1 に示した。

対母親、対父親の心理的距離について、対応のある  $t$  検定を行ったところ、有意差は認められなかった ( $t(19) = 1.43, n.s.$ )。

### 相関関係

Table 2 に各指標間の相関を示した。

Table 1 各尺度の平均値

		平均値	標準偏差
心理的距離	対母親	20.20	8.41
	対父親	24.25	11.04
家族機能	凝集性	31.85	6.08
	適応性	30.20	4.73
夫婦間葛藤	深刻さ	3.00	0.63
	恐れ	2.72	0.58
	自己非難	3.35	0.59

Table 2 各指標間の相関

	①対母親	②対父親	③両親間	④対両親	⑤面積
造形による 空間的距離・ 面積	①対母親				
	②対父親	.42 <sup>†</sup>			
	③両親間	.12	.87**		
	④対両親	.76**	.86**	.55**	
	⑤三角形の面積	.34	.89**	.95**	.68**
心理尺度得点	⑥母子心理的距離	-.15	-.04	-.04	-.04
	⑦父子心理的距離	.03	.65**	.65**	.21
	⑧凝集性得点	.24	.02	.02	.12
	⑨適応性得点	.30	.02	-.16	.10
	⑩深刻さ得点	-.13	-.45*	-.52*	-.33
	⑪恐れ得点	.13	-.07	-.02	-.00
	⑫自己非難得点	-.01	-.21	-.38	-.18
					-.29

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

**造形による空間的距離同士の相関** 対父親距離は、両親間距離とも三角形の面積とも有意な正の相関を示しているが、対母親の距離はこれらの相関は有意ではなかった。両親間がどれだけ離れているか、あるいは三者を結ぶ三角形の面積の大きさは、対母親距離との関係ではなく、対父親距離と関連することが示された。

**造形による空間的距離および面積と心理尺度得点との相関** まず、対父親距離と心理尺度による心理的距離との間には有意な正の相関(.65)が見られたが、母親については有意ではなかった(-.15)。対父親の空間的距離が大きいほど、対父親の心理的距離は大きい、対母親ではそのような関連がなかったことが示された。

また、造形による空間的距離と、家族機能測定尺度の下位尺度である凝集性、適応性の得点との間には、有意な相関は見いだされなかった。

さらに、空間的距離のうち、対父親距離、両親間の距離、および三者を結ぶ面積と、両親間葛藤尺度得点のうち「葛藤の深刻さ」得点との間には有意な負の相関が見られた。両親間の距離が離れるほど、父親との距離が離れるほど、また、面積が広いほど、造形の作り手である子どもから見た「夫婦間葛藤の深刻さ」の得点が低かった。両親間葛藤得点の他の下位尺度との関連は見いだされなかった。

## 考 察

家族造形法に関する基礎的研究として、本研究は、青年期女子が制作した家族造形法における親子あるいは夫婦の空間的距離と質問紙により測定した心理的距離との関係を調べることを目的とした。その結果、まず造形として配置し



た父親, 母親と作り手との距離は父親よりも母親との距離が有意に近かった。これは, 質問紙による研究 (大野木, 2009) や家族を人形の配置によって表現する Family System Test を用いた研究 (興津・馬場・川田・中西・角・佐藤, 2003), 単純図式投影法を用いた小島 (2011) など, 日本人の大学生を対象とした研究とも同様であった。このことは小島 (2011) が述べているように, 青年期である女子大学生にとって, 父親の存在が小さく, また, 父親と顔を合わせる時間が少なく, 父親との関係が希薄であるがゆえに, 母親よりも父親との距離感は遠くなる傾向にあることを表しているものと考えられる。

次に, 空間的距離と尺度による心理的距離との有意な相関関係は, 対父親では認められたものの, 対母親においては認められなかった。この点に関しては, 本研究では女子学生を参加者としているため, 母親との関係が近いものとして捉えており, 関係の捉え方がポジティブであろうと, ネガティブであろうと, 「近い」ことが優先されて造形が行われている可能性を示唆するものであると考えられる。また, 家族造形法では, 距離が近いことが持つ意味が必ずしもポジティブとは限らない。近さとそれが引き出す感情的な意味合いは異なる可能性があり, これらを個々に捉える必要性が考えられるが, 今後, これらを含めた詳細な検討が必要であろう。

対父親距離, 両親間の距離, および三者を結ぶ面積と, 両親間葛藤尺度得点のうち「葛藤の深刻さ」得点との間には有意な負の相関が見られ, 距離が離れているほど「葛藤の深刻さ」の認知が低くなっていた。これに関連する報告として, Crane & Griffin (1983) は, 夫婦間のパーソナルスペースが夫婦関係の指標となりうるのかを検討しており, その結果, 夫婦間のパーソナルスペースの距離が離れるほど, 質問紙によって測定された夫婦関係尺度の結果がよくないということが示された。この研究では, 夫婦間の空間的距離を夫婦が決めて測定したが, 一方本研究においては, 夫婦関係を大学生である子どもが造形として配置しており, 葛藤の深刻

さについても, 子どもが見た評定となっている。第三者からの視点であるがゆえに, たとえ夫婦間に葛藤があったとしても「両親間の距離が遠いとその葛藤を意識しなくてすむ」という参加者の感覚が反映されているものと考えられるのである。すなわち, 両親間に葛藤があり, かつ両者が近くに存在しているよりも, 離れている方が第三者である造形の作り手にとっては葛藤の深刻さは軽微になるという可能性がある。また, このことは近いからといって葛藤がないとはいえない, あるいは葛藤をはらんだまま近くにいて緊迫しているという表現がありうることを示しているといえよう。この点についてはさらなる検討が必要である。

さらに, 造形による空間的距離と, 家族機能測定尺度の下位尺度である凝集性, 適応性の得点との間には, 有意な相関は見いだされなかった。Berry et al. (1990) では, KFST を用いて人形による造形と家族機能測定尺度の原版である FACESⅢの凝集性との関連を調べている。その結果, KFST の二者間の距離の平均と凝集性得点の間には有意な負の相関が見いだされた。すなわち, 二者間の距離が近いほど, 凝集性得点が高かったのである。しかし, 本研究においては, 面積を含めてもこうした関係は見いだされなかった。このようなことが生じた理由の一つは, Berry et al. (1990) は家族全員を配置しているのに対して, 本研究は本人と父母のみを配置したことによるものと考えられる。すなわち, 家族の一部のみを配置したことによって, 家族の一部である青年期女子である子どもと父母の距離が小さく, 面積も小さくても, 同胞などを含めて配置した際には, 家族全体としての面積や二者関係の距離の平均が必ずしも小さいとは限らないというようなことが生じる可能性があるからである。この点を明らかにするためには, 全体を配置した家族造形を用いて, 家族機能との関連について検討する必要性がある。この点を改めてもなお, KFST と造形とで異なる点があるとすれば, それは先に述べてきたような客観的な家族の配置と造形として

の自分を一部に含めた家族の配置という性質の違いが関連するとも考えられ研究の余地がある。

以上のように本研究においては、造形による家族間の空間的距離と質問紙による心理的距離との関係は、パーソナル・スペースで二者関係のみを扱った研究や、KFSTを用いた研究とは異なる傾向が見いだされた。これらの結果が意味するところを明らかにするにはさらなる研究が必要であるが、代替ではなく家族造形法それ自体のもつ性質について検討を重ね、またこの技法を用いることによる実践における効果を明らかにしていくことが今後必要であろう。

## 引用文献

- Berry, J. T., Hurley, J. H. & Worthington, E. L. (1990). Empirical validity of the kvebaek family sculpture technique. *The American Journal of Family Therapy*, **18**, 19-31.
- Bischof, G. H., & Helmeke, K. B. (2005). Family sculpting procedures. In M. Cierpka, V. Thomas, & D. Sprenkle (Eds.), *Family assessment: Integrating multiple clinical perspectives*, 257-281. Cambridge, MA: Hogrefe Publishers.
- Costa, L. (1991). Family sculpting in the training of marriage and family counselors, *Counselor Education and Supervision*, **31**, 121-131.
- Crane, D. R. & Griffin, W. (1983). Personal space: An objective measure of marital quality. *Journal of Marital and Family Therapy*, **9**, 325-327.
- Duhl, B. S. (1983). *From the Inside Out and Other Metaphors*. Brunner/Mazel, New York.
- Duhl, B. S. (1990). 日本でのワークショップを経験して 家族療法研究, **7**, 166-167.
- Gehring, T. M. (1985). Socio-psychosomatic dysfunctions: a case study. *Child Psychiatry and Human Development*, **15**, 269-280.
- 八田武志 (1977). Doll Location Test に関する研究 (I) —精神神経症患者への適用例について— 適性研究, **10**, 1-6.
- 早樫一男 (2010). 家族造形法の深度その3 対人援助学マガジン, **3**, 90-96.
- 早樫一男 (2011a). 家族造形法の深度その4 対人援助学マガジン, **4**, 97-106.
- 早樫一男 (2011b). 家族造形法の深度その5 対人援助学マガジン, **5**, 97-104.
- 金子俊子 (1991). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, **3**, 10-19.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, **56**, 353-363.
- 小島弓枝 (2011). 青年期における家族関係の認知と抑うつ感との関連—家族関係単純図式投影法を用いた研究— 北星学園大学院論集, **2**, 95-105.
- Kvebeak, D., Cromwell, R. & Fournier, D. (1980). *The Kvebeak Family Sculpture Technique: A diagnostic and research tool in family therapy*. Jonesboro: Pilgrimage.
- Marchetti-mercier, M. C. & Cleaver, G. (2000). Genograms and family sculpting: An aid to cross-cultural understanding in the training of psychology students in South Africa. *The Counseling Psychologist*, **28**, 61-80.
- 興津真理子・馬場天信・川田幸司・中西美和・角さやか・佐藤豪 (2003). Family System Test を用いた家族構造についての基礎的研究Ⅴ—家族形態による違いと感情表出性との関連について— 日本心理学会第67回大会発表論文集, 327.
- Olson, D. H., Portner, J., & Lavee, Y. (1985).

- FACES III*. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- 大野木裕明 (2009). 女子青年から見た親子間の呼称と心理的離乳 仁愛大学研究紀要人間生活学部篇, 1, 53-61.
- Sherman, R. & Fredman, N. (1986). *Handbook of structured techniques in marriage and family therapy*. New York: Brunner/Mazel.
- (シャーマン, R., フレッドマン, N. (著)
- 岡堂哲雄・国谷誠朗・平木典子(訳) (1990). 家族療法技法ハンドブック 星和書店)
- 鈴木浩二 (1990). “家族療法界の妖精” Bunny Duhl とその家族造形法 家族療法研究, 7, 60-64.
- 鈴木浩二・渋沢田鶴子・櫻井明・鈴木和子・光元和憲・斉藤重司・中村はるみ・生島浩 (1986). 家族療法への招待 (3) 家族療法研究, 3, 67-80.